

上野の杜の 波瀾万丈

第七回 中国人留学生 一斉帰国

一九三七年の日中戦争開始は
美校中国人留学生の一斉帰国と
日中美術交流運動の途絶を招いた。

吉田千鶴子



上：李叔同筆 卒業制作自画像 1911年 本学蔵
下：卒業記念写真中の李叔同（中央）

年間八千人にも達した中国人留学生

昨年（二〇〇八年）三月、北京の中国美術館で開催された林達川回顧展とそのシンポジウムに招かれた。林達川は広東省に生まれ、国立西湖芸術専科学校で学んだ後、一九三二（昭和七）年に来日。東亜予備学校、川端画学校、帝国美術学校等を経て三十五年に東京美術学校（美校）彫刻科に入学し、四十三年に卒業した。在校中から梅原龍三郎、安井曾太郎に私淑し、油絵も描き始めた。卒業までに八年もかかったのは、日中戦争勃発のため二年あまり休学・帰国を余儀なくされたからだ。

一九三七（昭和十二）年七月、日本を戦争の時代へと引き込んでいく日中戦争が勃発し、五千人近い中国人留学生が一斉に帰国するという事態となったが、美

校でも林のほかに胡光弼、俞成輝、沈寿澄、趙琦、王式廓、許統璋、沈柏年らの留学生が帰国した。林は華僑である父親の伝手で再来日し美校に戻ることができたが、ほかは復学することなく、抗日宣伝画の制作に腕を振るい魯迅芸術学院その他で教鞭をとった王式廓を除いては帰国後の足跡は不明だ。多大な犠牲を払って来日し、憧れの美校に入学して本格的に勉強を始めたのも束の間、帰国せざるを得なかった彼らの心中は複雑だったに違いない。

この日中戦争によって日本と中国は敵対関係となり、一九七二（昭和四十七）年に国交が回復するまで疎遠な関係が続くことになる。その間、両国ともに長い激動の歳月を経過するなかで、かつての文化交流の歴史は忘れ去られ、交流が盛んとなった現今においてすら、それを思い起こそうとする人は少ない。しかし、日本

美術のメッカへの憧憬

と中国は古代からの関係は言うに及ばず、明治維新以後も文化交流が盛んに行なわれていたのである。その一例が本稿に関連のある中国人留学生のことであって、日清・日露の戦争に勝って強力な近代国家と目された日本に大勢の中国人青年が留学し、その数は最も多い年で八千人に達したという。美校でも一九〇五（明治三十八）年に第一号の黄甫周（舌画のパフォーマンズで名を知られた）が入学して以来、次々と中国人が入学し、中国人の存在は珍しいものではなくなったのである。

美校に限って見た場合、日中交流のパイプは留学生ばかりではなかった。東洋美術史教授の大村西崖は中国美術史学の発生に大きな影響を及ぼした学者として中国人によく知られていた。彼は幾度も訪中し、北京大学で講演したり日中美術家交流の拠点である西湖有美書画社を設立するなどして熱心に交流運動を進め、もちろん、美校の中国人留学生とも親交があった。例えば後年金魚大王と称した汪亜塵などは西崖の中国旅行のよき案内者であった。また、一九二二（大正十二）年から日中両国画家による日華聯合絵画展が中国と日本で毎年交互に開催されていたのだが、その日本側の代表は美校校長正木直彦で、事務局が美校内に置かれていたので、日中関係者の往来が頻繁にあり、中国人留学生にとって親しみやすい空気があった。しかし、そうした空気をも一掃してしまったのが日中戦争

だったのである。

ところで、美校で学んだ中国人たちが中国の近代美術および美術関連事業において主導的役割を担ったことは両国の研究者によってすでに検証済みだが、ここで特にユニークな存在として紹介しておきたい人物に中国人留学生第二号の李叔同（李岸、弘一大師）がいる。彼は帰国後中国の近代洋画・音楽・演劇の草分けとなり、のちに出家して修行に専念した。書家、思想家としても声望が高く、魯迅も心酔したという偉人であって、研究書も多く出ているが、近年、その激動の生涯が「一輪名月」と題する映画によって世に紹介され、一般にも大きな感銘を与えた。この映画は本学での取材を含めて制作された意欲作で、プー・ツンシンが李を、ビビアン・スーが日本人妻を演じ、第十一回中国電影華表賞優秀作品賞・最優秀男優賞を受賞した。DVDも発売されている。

この李叔同は西洋画科（のち油画科）の卒業生（一九一一年）だが、ほかの中国人も多くは西洋画科を志望した。それは同科が近代美術の中心地パリの美術学校で修行した黒田清輝をはじめとする教員たちによってフランス流の本格的な洋画教育が行なわれている場所であり、アジアにおける美術のメッカとして憧憬されたためである。時が経つにつれて他の科を志望する者も増えたが、それらも含めて合計すると美校が廃止になる一九五二（昭和二十七年）年までの中国人留学生は百三人（満州国籍も含む）である。ちなみに、中国人に少し遅れて入学し始めた朝鮮人は合計八十九人、台湾人は合計三十人、その他西欧諸国を含む諸外国人は合計十七人であった。本学に残る記録文書を見ると、少数精鋭主義の美校はかなりの難関だったらしく、幾度か受験して漸く合格した人や入学を断念して私立学校に入学した人も少なくない。運よく合格した者は日本人生徒と隔てなく指導を受け、入学者の約半数が卒業

まで在学した。研究科にまで進み、日本の官設・在野展に出品して力量を認められた人たちもいる。

留学生たちのその後

しかし、朝鮮人・台湾人留学生のことはひとまず置いて、中国人留学生について言うと、大変革時代の厳しい社会状況のもとで果たして日本で習得したものを順調に発展させることができたのか。特にある時期からは社会主義革命に奉仕する制作活動に従事する以外に道はなく、日本留学のことは経歴上の疵になり、かの文化大革命（文革）の際などは日本留学の痕跡すら消し去らざるを得ない状況だったのではないか。日本留学は却って不幸を招いたのではないか、などと想像してしまうのだが、そうした想像を覆したのが最初に述べた林達川の遺作展なのである。

展覧会場に並べられていたのは林が一水会や日展に出品していた頃の穏和な自然描写の油絵の延長線上にある作品であった。文革のときは例に漏れず田舎に下放されたが、その間も風景などを題材とする小品油絵を淡々と描き続けていたらしい。そうした作風が今の中国人にはむしろ新鮮に感じられるらしく、美術学生らしい若者たちが絵の前に座り込んで熱心に見ていた。このことは、林のようにストレートにはないにせよ、日本で学んだことを基にして自分の芸術を追求していた人々がもつと居て、やがて評価される日も来るだろうという希望的観測を筆者にもたらしたのであった。

（よしだ・ちづこ／美術学部教育資料編纂室）

次号予告

上野児童音楽学園 昭和八年六月～昭和十九年

昭和初期から戦時中にかけて東京音楽学校で行われた音楽の早期教育機関。ヨーロッパ視察を終えた乗杉嘉壽校長の発案により、昭和八年に同声会（同校の同窓会）を母体として開園した。空き教室を活用し、同校の教師や研究科生徒が指導に当たった。プリングスハイム指揮のマラーの交響曲第三番の演奏会にはドイツ語の合唱で出演し、批評家も「子供の合唱がいちばんうまくいった」（大田黒元雄）と絶賛した。戦況の悪化に伴い、昭和十九年の秋に閉鎖された。



右：劉錦堂（王悅之）筆 卒業制作 母と侍童 1921年
左：林達川筆 港湾速写 1970年代 遺族蔵

